
少女時代

玉木 もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女時代

【Nコード】

N1810Z

【作者名】

玉木 もとか

【あらすじ】

西垣優花のお話である。

小学生、中学生と成長していく過程での、西垣優花の心が描かれている作品です。

プロローグ もしも出会ってなかったら (前書き)

このお話は実話です。

あまり、文章を書くのが上手ではありませんので、そのの所ご理解
いただけるようお願いいたします。

アドバイス、感想、コメント等ありましたら、是非お願いします！
では、お楽しみください。

ブローグ もしも出会ってなかったら

ブローグ もしも出会ってなかったら

もしも私は彼女と出会っていなかったらどうなっていたのだろうか
かとたまに考える。

もしかしたら、今よりずっと良い人生だったかもしれない。
もしかしたら、今よりずっと悪い人生だったかもしれない。

分からない。

それが私の結論だ。

もし、私が彼女に出会っていなかったとしても私は恐らく同じ壁
にぶつかっていたと思う。

でも、それを思い知るのはもっと遅い時期だったかもしれないし、
そんなにも大きな壁だったなんて気付きもしなかっただろう。

ただ、壁が見えるだけ。

それで終わっていたと思う。

私は彼女と出会って、変わった。

変わった事が良かったのか、悪かったのか。

それさえも分からない

第一章 出会い（前書き）

すみません。

前の更新のときに言い忘れていたのですが、このお話は小さいま
まりごとに更新していきます。

よろしく願います！

第一章 出会い

第一章 出会い

「皆さん。新しい仲間が増えます。名前は西垣優花さん」

「よろしくお願ひします」

私は小さく頭を下げる。

私の家庭では転勤が多い。父の会社による都合のためだ。いわゆる転勤族である。

幼稚園のときは小学校に入る前に一度転勤をし、新しい地での小学校生活は僅か一年しかなかった。

その免疫があつてか、別れが悲しい事も無かつた。それは長くいられなかつた事もあつただらうが。

これも免疫があつてか、新しい地に来て新しい学校生活に不安は抱かなかつた。

そして、小学校二年生となつた今、また新たに転校をしたのだ。

そこは、全校生徒が900人前後と大きな学校だつた。

創立100年となり、古い校舎なのだが、補強工事がしてあり、災害に対しては安全である。

私は担任の先生に連れられ、二年一組の教室に入る。

そのときの第一声が、「うわっ。こいつ小せえ〜」だつた。

それを言つたのはクラスで一番大きい男の子である。

「小さい」と言われた事なんて何回もあるので、むっともしない。その男の子とは十センチ以上は絶対に背の差があつたと思う。私は小学校二年生の頃は百十五センチ程しかなかったのだから。

その日のうちになんとなくクラスのこの質問に答え、和気藹々とクラスに馴染めた。

そして、担任の先生に、

「今日はどうだった？クラスの皆とは仲良くなれそうかしら？」
と言う。

担任の先生は小太りで、優しいふいんきを持つ先生だった。その担任の先生が私が帰る直前に呼び止め、声をかけたのだ。

私はなんと答えていいのかも分からず、

「はい。仲良くしていく事ができそうです」
と曖昧に答える。

担任の先生は「そう」と短く答え、微笑む。

こうして私の転校初日の学校生活は終了した。

そして二日目。

転校初日には欠席していた少女が学校に来ていた。

そして、毎日行われる健康観察のときが来た。

その健康観察は出席番号と名前、今日の体調を言うのだ。私の場合、「出席番号三十四番西垣優香」となる。

それは普通の人にとっては造作もないことだが、初日に欠席していた少女には大変な事だった。

「はい。出席番号は？」

担任の先生は毎日の事なのだろうか、少女に優しく近づく。

「出席番号……五番」

それは今にも消え入りそうな声である。

私は辛うじて少女と席が近かったため、聞こえたが教室の隅々まで聞こえるような声では決して無い。

「それじゃあ、名前は？」

「大野……紗枝」

それは本当にか細い声でこちらまで不安になってくる。

私は大野紗枝をひそかに応援した。

実際に声を出して応援している人もいるが、私には大抵そんな事は出来ないだろうと思う。

クラスの何人かはこのやり取りをうつつとおしいと思っていたのだろうか、とずいぶん経ってからこのやり取りを思い出すとそう思った。私はそのときはとても素直で、人に裏表なんて無いと思っていた。

「元気ですか？」

「げ……元気です」

その声はあまり元気じゃないような声にも聞こえるが、これが地なのだろうと直感的に思う。

「はいっ。よくできました」

先生は軽く少女の肩をたたく。

そして、大野紗枝の健康観察が住んだ後はだいぶスムーズに進み、私も最後に健康観察を終える。

その後、先生は大野紗枝が今日健康観察ができた事を褒め、朝の会を終えた。

大野紗枝という少女は、大人しく控えめのようなのである。

あまりクラスの子と話していなかった。話しかけられたら、今にも消え入りどうな声で短く会話のやり取りをしているようである。

私は少し緊張しながらも大野紗枝に声をかけにいった。

「私、昨日転校してきた、西垣優香。宜しくね」

大野紗枝は少しの間、目を瞬く。そして、はっとしたようにあわてて答える。

「よ……よろしくね」

「ねえ。貴方の事、なんて呼べばいい？」

「……何でもいいよ」

少し戸惑ったように間を空け、答える。

「それじゃあ、紗枝ちゃんでもいい？私のことはなんて呼んでくれてもいいから」

私は仲の良い子でも決して呼び捨てにはしない性分だった。そのため、この少女に対しても“ちゃん”付けである。

「それじゃあ……優香ちゃんでもいい？」

「うん。いいよ」

私はなんとなく彼女とうち溶け合えたような気がした。

第二章 生まれて初めての友達との喧嘩

第二章 生まれて初めての友達との喧嘩

そして、私は紗枝ちゃんとかかなり仲良くなっていた。

私は紗枝ちゃんときを過ごすのは好きで仕方が無かった。紗枝ちゃんは、私が思っていたよりは明るい子で、普通に話せるようにはなっていた。

今思うと、紗枝ちゃんから見ればうつとおしい女だと思っていたんじゃないかと思う。自分の話ばかりで、相手の話を聞く事もしていたが、そのくだらない話に一方的に話を着き合わせていたんじゃないか、と。

当時の私はそんな事を考えもせず、紗枝ちゃんと接していた。

私は習い事などもしていたため、あまり紗枝ちゃんと遊ぶ機械は多い方ではなかったが、私にしては紗枝ちゃんと過ごす時間は他の者と比べればかなり多かった。

そして、ある日、紗枝ちゃんの家遊びに行った。

それは紗枝ちゃんと過ごすようになってからしばらくした時の事で、紗枝ちゃんと遊ぶ事が日課にもなっていた。

その日は復旧しつつある携帯ゲーム機を持って遊びに出かけた。

「うわあ。色々なソフトを持ってるんだね」

「……うん。ちよつと言ったら買ってもらえるんだ」

三十個ほどのゲームソフトがケースに入っており、どれも新鮮味あふれる物ばかりだった。

「……いいなあ。家では誕生日とかしか買ってもらえなくて、誕生日の日ですら買ってもらえないこともあるんだよ」

「えっ！ そうなの？ 可哀想。ねえ、このゲームはやった事あるの？ これ、通信プレイが出来るんだ。やってみない？」

一つのゲームソフトを指差しており、そのゲームはコマーシャル

なので最近発売された物だ。

「うん。やるやる」

私はそのゲームは気になっていて、それがやれるのならばと思いで喜んでその話に乗った。

本人のゲームソフトと言うだけあって、紗枝ちゃんはゲームをするのはうまかった。

だが、私はゲームをするのは頭を使う物意外はあまり得意ではなく、私は明らかに紗枝ちゃんよりも技術で劣っていた。

そこで、少しだけ悪口を言ってしまった。

「いつものアイテムばかり使うんだね」

それは悪口というより嫌味に近かったかもしれない。

それにむっとしたのか、

「優香ちゃんだって、使おうとしてるじゃん」

しばらく無言になって、私は紗枝ちゃんにまた何か言う。

そして、紗枝ちゃんも私に何か言う。

私はさほど苛立ってはいなかった。だが、悪口を言っているうちにそれが当たり前になっていって悪口を言ってしまった。

そして、紗枝ちゃんもそれに応じて返答する。

そのの繰り返しだった。

それを繰り返して、その間ですら苛立ちを持たなかった私は、帰りのチャイムがなっている事に気づく。

「あつ！そろそろ時間だ。帰らなくちゃ」

私は断りをいれずに通信していたゲーム機の電源を切る。

紗枝ちゃんは自分のゲーム機の電源を切り、ソファに放り投げる。

二階にいた私達は一階へ降りていく。

私は何の前触れも無く、気ままに降りていく。だが、紗枝ちゃんの足取りは妙に遅かった事は覚えている。

「じゃあね」

私は玄関に行き、そう言って軽く紗枝ちゃんに手を振る。

いつもは「じゃあね」というような軽い挨拶をくれるのだが、その返事は無くて、紗枝ちゃんはまだ手を振っているかどうかも分からないほど曖昧に小さく手を上げただけだった。

今思うと、私はまったく言ってもいいほど怒ってはいなかったが、紗枝ちゃんはそれなりにおこっていたのではないかと、いまさらながらに思う。

紗枝ちゃんと口げんかをしてから次の日。

私は紗枝ちゃんに会い、

「おはよう」

と言う。

紗枝ちゃんは一瞬驚いたように目を大きく見開いたのを良く覚えている。

「おはよう」

その声は耳の良い私にもあまり聞こえないようなぐらいの声だったが、私には「おはよう」と聞き取れた。

生まれてはじめての友達との喧嘩はあまりにも軽い物で、始まりも終わりも分からないような喧嘩だった。

喧嘩と呼んでいいのかさえ分からない。

これが、紗枝ちゃんとの喧嘩で、最初で最後の紗枝ちゃんとの喧嘩だった。

当時、こういうことで謝る事の無かった私は、本気で謝るほどの喧嘩ではないかと思っていたのか、それを私は思い出せなかった。

第三章 出来なかった事 ?

第三章 出来なかった事

私は小学二年生の冬。十二月頃の事。

私は年間行事でその当時、一番嫌いな行事のある日だった。

それは持久走大会だった。

私は決して運動神経の良い方ではない。そして、持久力も無い。

そのため、毎年行事にあるような運動会や持久走大会が嫌いで仕方が無かった。

転校してきた学校では朝の時間と言う物が設けられており、その時間では読書をする。たまに、ボランティアの読み聞かせもあり、私はその時間が好きだった。

だが、十一月の下旬になると、その時間は運動場を走ると言う物に変わる。

それは、私にとって悪夢のような物だった。

そのため、十一月の下旬から十二月の中旬は、私にとってあまりいい年ではない。

私は当時も今も真面目な生徒だったため、やるからには精一杯頑張っただけだった。

そして、そんなある日。

私は紗枝ちゃんの走りを見て驚いた。

紗枝ちゃんは内気の割りに、運動神経はかなり良かった。

私は走り終わった紗枝ちゃんに急いで駆け寄る。

「す、すごいね。紗枝ちゃんは！」

走り終えた紗枝ちゃんの順位はなんと、一位だった。

私は後ろから数えた方が早いぐらいの位置にいる。

「えへへ。私が得意なのって運動ぐらいしかないから」

紗枝ちゃんは小さく照れ笑いをする。

「本当にすごいね。本番も頑張つてよ！」

「うん」

そして、紗枝ちゃんは本番でも二位との差をつけて一位になった。

そして、私達は小学校三年生になった。

それまでの時間はあつという間に過ぎていった。

今回の持久走大会でも、紗枝ちゃん是一位を取った。二位との差をつけて。

だが、それは紗枝ちゃんの最後の持久走大会の一位だった。

そして、三年生を無事に終え、私達は四年生となる。

四年生となったとき、ある事件は唐突に起きた。

私は小学校の事を思い出しても大まかな事しか覚えていない。それだけ、記憶も薄れ、覚えるほどの事ではなかったのか、と今では思う。

だが、私はこの事件を忘れる事は一生無いだろうと思う。

その事件は突然舞い降りる。

四年生の十一月の上旬。そろそろ持久走の練習が始まる頃である。

「ねえ、紗枝ちゃん」

「な、何」

紗枝ちゃんに声をかけたのは、吉田亜佐美ちゃんだった。

紗枝ちゃんは陸上教室に通っていて、その吉田亜佐美ちゃんも陸上教室に通っているのだと紗枝ちゃんから聞いた事がある。

「あのさあ、今度市の大会があるじゃん？」

「うん」

紗枝ちゃんは何か怯えながら頷いている。

私はその場で、紗枝ちゃんは何を怯えているのだろう、と思う。いつもは普通に話しているのだ。

紗枝ちゃんの亜佐美ちゃんにたいする態度が変わったのはつい最近である。

何があっただらう？

「それでさあ……。その市の大会か、学校の持久走大会。どっちかさあ、一番をあきらめてよ。それで、私に一番を頂戴」

はあ？

私は思わず眉をひそめる。

頼んでるにしては態度でかすぎないか！？それに、そんなことしたら八百長じゃん。

「……………」

紗枝ちゃんはそれを聞いて困ったように顔をゆがめている。

「ねえ。それじゃあさ、考えておいてよ」

私は亜佐美ちゃんに対して疑念を積もらせたが、私は何も言えなかった。

私がつつと麻美ちゃんのほうを見ているが本人は気付かない。

「ねえ。話の続き、何だっけ？」

「あ、そうそう」

私は麻美ちゃんのせいで切り上げられていた、話に戻した。

私が亜佐美ちゃんが紗枝ちゃんに八百長をしるといつているのを知ってからも、飽きることなく何度も言ってきた。

私は亜佐美ちゃんに何かいおうと思っただが、何もいうことが出来ずにいた。

それは、「お前に何が分かるんだ」みたいな事を言われたら何もいえないような気がしたのだ。

そして、何もいうことが出来ずにいて、そのまま何の進展も無くそれを繰り返した。そして、私は何かいわなかった事を後悔する事になる。

あれ。今日は着てないのかな？

持久走大会の一週間前。紗枝ちゃんは学校を休んだ。
私は風邪かな、と思つて、その日は仕方が無くいつもはしない読書をした。

そして、次の日も。また次の日も紗枝ちゃんは休んだ。
大丈夫かなあ……。あと少しで持久走大会なのに……。
今日も着てない……。

私は紗枝ちゃんのいない空いた席を見つめた。
すると、先生がなぜか暗い顔をして入ってきた。

いつもは明るくて元気な先生なのに……、どうしたんだろう。

「今日はお知らせがあります」

先生はいつもよりワントーン低い声で話し始める。

「朝の会ではなく、一時間目の総合のときに話そうと思います。それでは朝の会を始めましょう」

少し先生は元の口調に戻し、朝の会を始めた。

私は先生が何故あんなにも深刻な顔をしているのか。心のどこかで分かっていたのかもしれないが、私にははつきりと分かっていなかった。

そして、朝の会が終わり、気に掛かりながらも私は読書を始めた。
しばらくすると、一時間目の始めのチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

そして、挨拶をし、みんなが席に着いた。

「それでは……お話をしますね」

先生は一度そこで言葉を切り、クラス全体を見渡す。

「現在、紗枝算は学校をお休みしていますね。前までは風邪だと言っていました、本当は風では無いんです」

え？

クラスでざわめきが広がる。

だが、先生が注意するとそれはすぐに納まった。

そして、私はそれを聞いて先生の顔をより一層真剣に見る。

「今日は亜佐美さんも学校を休んでいますよね？」

私はさつと亜佐美ちゃんの席を見る。そこにはいつも元気にいる麻美ちゃんの姿は無い。

もしかして……

「知っている人もいるかもしれませんが、亜佐美さんは紗枝さんに市の大会が持久走大会の一位をあきらめてくれ、と言っていたそうです」

それが原因……？

「それで、亜佐美さんは責任を取るためにも、明日の持久走大会には出場しないそうです」

私はそれを聞いて何故か腹がたった。

紗枝ちゃんは運動神経がよくて、いつも徒競走や持久走で一番をとっていた。それがすごいと思って、紗枝ちゃんを褒めていた。

確かに亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんがいたからいつも二番だったのかもしれない。だけど、亜佐美ちゃんがやったのはいけない事だと思う。

それで、結局紗枝ちゃんにとって償いになったのかというところでもないと思う。紗枝ちゃんなら市の大会のほうも出ないと思うから。

第一、亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんに直接謝って無いんじゃないかと私は思う。

大丈夫かなあ、紗枝ちゃん……

第三章 出来なかった事 ? (後書き)

今回は一つの章が長いので、二つに分けます。
更新をお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810z/>

少女時代

2011年12月10日10時54分発行